弘前大学
広報誌

ひろだい

vol.
16
2011.3

被ばく医療総合研究所
被ばく医療総合研究所 所長　佐藤　敬

男女共同参画推進室
男女共同参画推進室 室長　杉山祐子

地域企業との対話を通して培う企画提案力
森　樹男　人文学部教授

［学内トピックス］話題の広場から
第10回弘前大学総合文化祭を開催
平成22年度「被ばく医療プロフェッショナル育成計画」開講式を挙行　他

特集
［弘前大学出版会］
設立7年目、100冊刊行は目前。確実に成果を生み出してきた弘前大学出版会の次なる展開。
弘前大学出版会 編集長 中根 明夫

出版物の発行によって地域に貢献していくことが、弘前大学出版会の理念の一つ。

特集

［弘前大学出版会］

設立７年目、100冊刊行は目前。確実に成果を生み出してきた弘前大学出版会の次なる展開。

国立大学法人では全国初の学内組織として、平成16年６月、注目のスタートを切った弘前大学出版会。今年度は出版会賞を創設し、来年度は100冊目の刊行が予定されるなど、活発な活動を展開する弘前大学出版会の中根明夫編集長に、出版会が果たすべき役割と、これまでの成果、今後の展望についてうかがいました。

研究者の意欲を高める学内組織の出版会の発足

平成16年6月28日に設立された「弘前大学出版会」は、国立大学法人としては全国で初めて、学内に組織された出版会です。平成20年5月には、大学出版部協会への入会も認められました。

弘前大学出版会が発足した背景には、「地方というハンディを背負った本学の研究者が、自らの研究成果を容易に出版できるよう手助けしたい」という、遠藤学長の強い思いがありました。たとえば科研費報告書などは、高く評価されるべき内容のものであっても、残念ながら、一般の目に触れる機会はほとんどありません。また、文系・教育系・芸術系研究者の研究論文は、投稿する場が少なく、かなりのボリュームがあるため、個人で出版するには経費と手間がかかります。こうした状況に対して道を開くため、弘前大学出版会が立ち上げられたのです。

設立以来、年間15冊のペースで刊行し、平成23年1月末現在までで85作品を送り出してきました。出版会立ち上げから携わる中根編集長は「コンスタントに出版しています。出版事業としては、安定してきたのではないかと思っています」と、これまでの活動に成果を見出しています。

ジャンルを限定せずに質の高い作品を刊行する

研究成果から教養書、教科書、地域の特色や文化を紹介するものなど、幅広いジャンルの図書の発行を手がけている弘前大学出版会。大学の教育研究活動の補助活動として位置づけられていますが、中根編集長は「大学の出版会だからといって、難しい本を出しているわけではありません」と話し、間口の広さを強調します。

所定の審査で出版会が認めれば、だれもが出版できるので、著者は教員に限りません。学生や事務職員、プロのノンフィクションライターによる著作も発表されています。

弘前大学出版会賞で受賞者に贈られたオーナメント。

弘前大学出版会によってこれまでに世に送り出された刊行物。

弘前大学出版会　編集長
中根　明夫（なかね　あきお）

弘前大学大学院医学研究科　感染生体防御学講座教授。医学博士。専門分野は微生物学、免疫学。1952年、札幌市生まれ。1974年、北海道大学農学部卒業。1980年、北海道大学医学研究科修了。1980～1981年、ウイスコンシン大学マディソン校研究員。1983年、北海道大学助手。1984年、北海道大学講師。1989年、北海道大学助教授。1994年、弘前大学医学部教授。茶道歴35年。准教授の資格を持ち、現在は弘前大学医学部茶道部の顧問を務めている。

東奥日報に連載後、再編集して単行本化された『ようこそ、フランス料理の街へ。』は、平成18年にブックインとっとり第19回地方出版文化功労賞を受賞し、人文学部の4年生4人が編集した『弘大ブックレットNo.5　津軽から発信!国際協力キャリアを生きる　JICA編』は、平成21年にJICA広報グランプリ特別賞（推進員特別賞）を受賞するなど、全国的に注目される話題作も登場しています。

しかし、課題も残されています。中根編集長は「文系の先生方による図書が、まだ少ないのが現状です。弘前大学出版会の学内での認知度を、もっと上げていかなければならないと思っています」と、質の高い作品の掘り起こしに意欲を見せます。

弘前大学出版会賞の創設と100冊刊行記念企画の実施

設立から6年を経た平成22年、弘前大学出版会賞が創設され、第1回表彰式が7月8日に開催されました。受賞したのは『津軽の華』（津軽の華制作委員会編）、『あっぱれ!津軽の漆塗り』（佐藤武司著）、『ようこそ、フランス料理の街へ。』（丸谷馨著）、『校長日記　養護学校365days』（安藤房治著）、『弘大ブックレットNo.3　Dr.中路の健康医学講座』（中路重之著）、『弘大ブックレットNo.5　津軽から発信!国際協力キャリアを生きる　JICA編』の6作品。著者には記念の光学ガラス製オーナメントが贈られました。この賞は毎年の恒例行事とすることが決まり、中根編集長は「著者の励みにしていただきたい」と話します。

また、100冊目の刊行が目前となったことから、出版会企画として弘前大学を多くの方々に紹介する図書の制作準備を進めています。並行して、弘前大学キャンパスの四季を紹介する写真集の制作準備を進めています。合わせて、イベントの開催も予定しています。

活発な出版活動を続け、大きな節目を迎えることとなった弘前大学出版会。さらなる発展に期待が寄せられています。

ブランド化の夢を掲げて次なるステップへ踏み出す

出版に際しては、応募原稿の場合、著作者が大学関係者であれば、制作費は出版会が100万円を上限に支出、不足分は著作者が負担し、販売による回収分は大学に還元されるシステムです。中根編集長は「先生方の業績を上げる手段として出版会はお役に立てると思います。また、地域に貢献する図書を、積極的に発行していきたいと考えています。自分の作品を世に出したいと考えた時、弘前大学出版会を頭に思い浮かべていただきたいです」と、学内外に出版会の利用を呼びかけます。

また、出版会の企画による『津軽はおもしろいシリーズ』も、第二弾以降がいまだ発行されていないことから、シリーズ化に向けてテーマを構想中。さらに、将来的には電子出版も視野に入れ、その準備にも着手したいと考えています。

出版会の事業は、弘前大学の知名度を高める役割も担っています。「弘前大学出版会をブランド化したい」と語る中根編集長。良書を手がけ続けることで、それは実現できると確信しています。

平成21年5月に、学内共同教育研究施設の１つとなった。

［被ばく医療総合研究所］

緊急被ばく医療のための人材育成と体制整備を目指す北日本の教育研究拠点。

弘前大学は、地域的特性から、緊急被ばく医療に対する取り組みを推進している東日本唯一の大学です。大学附置施設として平成22年度から設置された「被ばく医療総合研究所」は、被ばく医療における学内の教育研究機関。被ばく医療のプロフェッショナル養成と、被ばく医療の体制整備という役割を担い、北日本の拠点として成果を生み出すべく、さまざまな活動を展開しています。

青森県における被ばく医療の質の向上と活性化に貢献

原子力関連施設が数多く存在する青森県。地域住民の安心･安全確保の一環として、万が一にも緊急被ばく事故が発生した場合を想定し、緊急被ばく医療のための人材育成と体制整備は必要不可欠となっています。

その役割の一端を担っている弘前大学では、大学院保健学研究科を中心として、平成20年度から、緊急被ばく医療に対する取り組みを推進してきました。

さらに、学長を含め7名のメンバーからなる「弘前大学放射線安全機構」も組織され、全学的体制で、これに臨んでいます。

平成21年度からは、大学附置施設として「弘前大学被ばく医療教育研究施設」を設置。平成22年10月に「被ばく医療総合研究所」と名称変更されました。

被ばく医療総合研究所は、被ばく医療における学内の教育研究拠点であるとともに、各部局がそれぞれに展開している取り組みを総括支援する機関です。文部科学省科学技術振興調整費「地域再生人材創出拠点の形成」事業として実施される「被ばく医療プロフェッショナル育成計画」（平成22年度～平成26年度の5ヵ年計画）に基づき、専門性の高い教育研究プログラムを構築し、青森県における被ばく医療の質の向上と活性化に貢献します。

被ばく医療総合研究所の佐藤所長は「この研究所の役割は、被ばく医療のための体制整備の基礎を担うことと、緊急被ばく医療の研究拠点として、研究人材を育成していくことです」と説明します。

放射線生物学、放射線物理学、放射線化学の3部門体制で研究を進める被ばく医療総合研究所。学内の各部局とも連携し、幅広い教育研究活動を展開する。

幅広い専門領域をカバーする教育研究カリキュラムを構築

被ばく医療総合研究所では、放射線生物学、放射線物理学、放射線化学の3部門に分かれての研究体制がとられています。物理学と化学の両部門は、今年1月に千葉県の（独）放射線医学総合研究所から教授が赴任したばかりで、これから具体的な研究が始まります。生物学部門では現在、放射線が誘発する染色体異常の分析や、放射線による発がんのメカニズムについての研究が進められています。

また、医学研究科や保健学研究科と連携して被ばく医療の現場で活躍する専門家や、被ばく医療の高度専門教育研究者の育成も行なっています。「被ばく医療プロフェッショナル科学コース」と「被ばく医療プロフェッショナル医科学コース」の2コースがあり、育成の対象者は、博士後期課程在籍者及び博士課程入学と同等の学力･学歴を有すると認められ、医療や教育･研究、行政の各機関等に従事する現職者。所定の単位を修得した受講者に修了認定を行なうもので、3年目には各コース2名以上の修了者を育成することを目標としています。事業の実施期間が終了する5年目には、コース修了者は12名以上となる見込みです。

修了者は、被ばく医療に従事する関係職者への教育を通じ、現場での人材育成を担います。

北日本の拠点となるべく研究成果を生み出したい

平成22年7月からは、弘前大学医学部附属病院に設置された「高度救命救急センター」も稼働を開始し、青森県における緊急被ばく医療への対応は、さらに強化されています。

高度な被ばく医療ができ、重症患者の最終的な受け入れ機関となる三次被ばく医療機関は、国内で2ヵ所。東日本地区は千葉県の（独）放射線医学総合研究所、西日本地区は広島大学が指定されています。

平成22年10月25日に行われた「被ばく医療プロフェッショナル育成計画　開講式」で受講者に向けて式辞を述べる遠藤学長。

開講式での受講生代表挨拶。

開講式に続き、放医研の明石先生が講演。

被ばく医療総合研究所 所長
佐藤　敬（さとう　けい）

弘前大学大学院医学研究科長。医学博士。1950年、北海道深川市生まれ。1975年、弘前大学医学部卒業。1979年、弘前大学助手。1983～1985年、ユタ大学留学。1996年、弘前大学教授。2006年、弘前大学医学研究科長。2010年3月23日、被ばく医療教育研究施設長に就任。同年10月1日、改組により被ばく医療総合研究所所長に就任。弘前大学医学部ラグビー部部長。趣味は音楽鑑賞、特にオペラが好き。

弘前大学医学部附属病院は、県の緊急被ばく医療マニュアルで「青森地区三次被ばく医療機関」に位置づけられています。佐藤所長は「もしも青森県で原子力災害が発生した場合、急性期傷病患者を千葉県まで搬送するのでは距離があり過ぎます。高度救命救急センターであれば、ヘリポートがありますから、短時間での患者搬送が可能となります。弘前大学が高度緊急被ばく医療に対応できる北日本の拠点として認知されるよう、医師や看護師などの育成や研究体制の整備など総合的に進めていきたい」と、現状での目標を語ります。

原子力災害による緊急事態への対応は、国内では事例が少ないことから、海外の研究機関との連携も欠かせません。この分野の先進国フランスやアメリカの専門機関へ人材を派遣することに加え、世界各国からの研修を受け入れたり、共同研究に取り組んだりしながら、研究成果を生み出していきたいと語る佐藤所長。「世界的レベルで、人材育成のニーズがあります。そういう意味でも、被ばく医療総合研究所の果たす役割は大きいと思います」と、その存在意義を認識します。

本学の特色を生かし確立する社会貢献と世界的研究

被ばく医療への取り組みは、学術的な研究や、医療現場の体制整備のみにとどまりません。原子力災害発生時の現場対応や、情報管理の仕方など、あらゆる観点から研究が進められる必要があり、研究機関は事例研究などを通して、マニュアルとなるものを示していくことが求められます。

同時に、関係職者のすべてが、緊急被ばく医療に対応できるプロフェッショナルを目指すべきと説く佐藤所長。「たとえば情報一つで、風評被害がもたらされてしまう可能性もあります。放射線の基礎知識を備えていれば、こうした事態は防ぐことができるかもしれません。」と話し、大学、行政、原子力事業者など関連する機関が一体となった取り組みの重要性を示唆します。

原子力関連施設が集積しているという地域的特性から、北日本の拠点を目指して、緊急被ばく医療に取り組む弘前大学。佐藤所長は「社会貢献と世界的研究の確立を目指します」と、研究をリードする立場から決意を語ります。

記念撮影の様子。鈴木文部科学副大臣（前列左から4人目）にも出席していただきました。

学内トピックス

話題の広場から

平成22年度弘前大学及び弘前大学大学院秋季学位記授与式を挙行

平成２２年度弘前大学及び弘前大学大学院秋季学位記授与式が９月３０日（木）午前１０時３０分から事務局３階大会議室において行われ、２８名に学位記が授与されました。

平成２２年度秋季の学位記授与者内訳は、次のとおりです。

○学士学位記授与者

人文学部	7名
教育学部	3名
医学部保健学科	1名
理工学部	3名
農学生命科学部	3名

○修士学位記授与者

保健学研究科	1名
理工学研究科	1名
農学生命科学研究科	5名

○博士学位記授与者

医学系研究科	2名
医学研究科（学位論文提出者）	1名
理工学研究科	1名
合　　計	28名

学長より学位記を授与される卒業者

平成22年度弘前大学シニアサマーカレッジを実施

本学では、今年度で5回目となるシニアサマーカレッジを、平成１８年度の事業開始から継続して開講している唯一の大学として、９月６日（月）から９月１０日（金）までの１週間にわたり実施しました。

昨年度とは違い、１週間と短い日程でしたが、フィールドワークを多く取り入れ、木村秋則氏や佐藤初女氏、加藤丈夫氏など個性豊かな方々を講師に迎えて、工夫を凝らした結果、全国各地から応募があり、２０名が受講しました。

初日には、開講に先立ち入学式が行われ、主催者側から、遠藤学長及び共同主催の清藤社団法人弘前観光コンベンション協会長による挨拶の後、後援側である青森県から商工労働部の馬場観光局長及び弘前市長代理として商工観光部の佐藤観光物産課長から挨拶をいただきました。

また、講義後はウェルカムパーティを行い、パーティでは、今回オプショナルツアーを企画した人文学部の学生も参加して終始和やかなムードでした。

白神自然観察園での講義風景

講義内容は、弘前城の築城、りんごの自然栽培、青森県の工芸品、弘前ねぶた絵、津軽出身の文学者、漫画ブームの原点と加藤謙一氏、医療・健康、地元の方言に関する講義のほか、９月６日は弘前公園を散策しながらの講義、９月７日は岩木地区にある木村秋則氏のリンゴ園を見学、９月８日は弘前市立観光館での講義の後、岩木山麓の嶽地区にある森のイスキアでの講義、９月９日は白神自然観察園内を散策というような、弘前大学のキャンパスを離れて現地を訪問し、講義を行いました。

９月１０日の最終講義の後には、閉講にあたり卒業式が行われ、遠藤学長から受講生一人一人に修了証書を手渡しました。

卒業式終了後、さよならパーティを開き、受講生相互及び講義を担当した講師、オプショナルツアーを企画した人文学部の学生との交流を深め、別れを惜しんでいました。

「加藤謙一文庫」開設式、「同記念碑」除幕式を開催

本学では、前身校の一つである青森県師範学校の卒業生で、戦前戦後を通じて多くの漫画家を育て名編集長と謳われた故加藤謙一の業績をたたえ、附属図書館に同氏が編集した「少年倶楽部」「野球少年」「漫画少年」など２６３冊を納めた「加藤謙一文庫」を開設しました。文庫の開設にあたっては、同氏の四男、加藤丈夫氏から多数の蔵書寄贈がありました。また、同氏に由来した記念碑も完成し、９月７日（火）に開設式と除幕式が行われました。加藤謙一は、１８９６年弘前市で生まれ、「子どもは国の宝だ」との信念のもと少年雑誌の編集に一生を捧げ、手塚治虫、寺田ヒロオ、藤子不二夫、石ノ森章太郎、松本零士など戦後を代表する著名な漫画家を育て今日の漫画文化の礎を築きました。

「加藤謙一文庫」開設式でのテープカットの様子

附属図書館前に完成した記念碑
（左から遠藤学長、三村青森県知事、加藤丈夫氏）

また、附属図書館主催の「加藤謙一資料展」が９月７日から１２日まで同大学創立５０周年記念会館で開催され、多くの市民が見学に訪れました。

平成22年度弘前大学及び弘前大学大学院秋季入学式を挙行

平成２２年度弘前大学及び弘前大学大学院秋季入学式が１０月１日（金）午前１０時３０分から事務局３階大会議室において執り行われました。

平成２２年度秋季の入学者内訳は、次のとおりです。

医学部医学科	20名
理工学研究科博士前期課程	1名
理工学研究科博士後期課程	2名
農学生命科学研究科修士課程	2名
合　　計	25名

告辞を述べる遠藤学長

弘前大学北日本新エネルギー研究所開所式典を挙行

１０月１日（金）、本学北日本新エネルギー研究所開所式典を挙行しました。

開所式典では、遠藤学長から、「弘前大学北日本新エネルギー研究所は、原子力や化石燃料以外の地元青森県に豊富にある自然エネルギーの使い手として、先兵の役割がある。地元青森県や青森市との連携を強化し、中央及び地元の産業界の期待に応えていかなければならない。」と式辞が述べられました。続いて神本研究所長より「寒冷地用EV」や「燃料電池システム等のシステム技術とシステム評価」、「シリカ還元」、「バイオマス変換」、「地熱等の熱利用」などの具体的な研究に関する説明がありました。

また、開所式典終了後には、遠藤学長・神本研究所長による北日本新エネルギー研究所の看板上掲が行われました。

本学ではこの日、北日本新エネルギー研究所を含め、その他、白神自然環境研究所、被ばく医療総合研究所の３つの附置研究所が誕生しました。

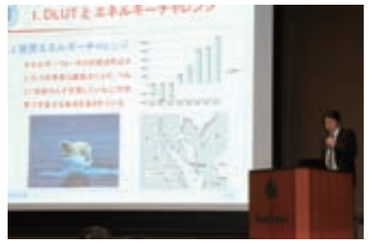
看板上掲の様子

第２回弘前大学国際シンポジウム「エネルギー・環境国際シンポジウム in 青森」を開催

本学北日本新エネルギー研究所では、開所を記念し、「エネルギー・環境国際シンポジウム in 青森　第２回弘前大学国際シンポジウム」を１０月６日（水）、７日（木）の２日間に渡り、弘前大学創立５０周年記念会館みちのくホールで開催しました。

シンポジウムには、エネルギー関連分野に取り組む海外からの研究者、国内の研究者・学生及び市民ら約３００名が参加し、新エネルギーの展開や取り組みについて理解を深めていました。

シンポジウム初日は、開所記念講演として堤東京大学エネルギー工学連携センター長による「低炭素社会構築のためのエネルギー・環境技術戦略」、宋大連理工大学・エネルギー研究院長による「大連理工大学におけるエネルギー分野への取組み」及び神本北日本新エネルギー研究所長による「北日本新エネルギー研究所の目指す研究・教育と社会の連携」と題した講演があり、その後、国内外の有識者によるパネルディスカッションが行われました。


宋大連理工大学・エネルギー研究院長による講演の様子

最終日には、教員と学生によるディスカッションが行われ、エネルギー問題について、活発な議論が交わされました。

第２回「緊急被ばく医療国際シンポジウム」を開催

「緊急被ばく医療現場における医療専門職の役割と課題」をテーマに弘前大学大学院保健学研究科第２回「緊急被ばく医療国際シンポジウム」を１０月１０日（日）、本学医学部コミュニケーションセンターで開催しました。

本学大学院保健学研究科では、多くの原子力関連事業所が集中している青森県における緊急被ばく事故に対する安全、安心の確保、原子力関連企業従事者の医療リスク管理システムの構築及び被ばく医療に対応できるメディカルスタッフの養成を目指し、平成１９年度から緊急被ばく医療人材育成の取組みを開始。平成２０年度からは文部科学省特別経費のプロジェクト事業として「緊急被ばく医療人材育成及び体制の整備」を実施しています。

今回のシンポジウムは、本学被ばく医療総合研究所と共催し、独立行政法人放射線医学総合研究所、独立行政法人日本原子力研究開発機構、財団法人環境科学技術研究所、日本原子燃株式会社及び青森県の後援により開催したもので、関係機関から約１００名が出席。保健学研究科における「緊急被ばく医療人材育成プロジェクト」の現状と課題が発表されたほか、フランスをはじめ国内外の関係機関から５名のシンポジストを迎え、フランスにおける緊急被ばく医療と教育、茨城県東海村ＪＣＯ臨海事故での被ばく医療経験についての講演や「緊急被ばく医療人材育成プロジェクト」のポスターセッションが行われ、活発な質疑応答が行われるなど、参加者らは知識を深めました。

関係者による記念撮影

また、前日には、ウェルカムレセプションが開催され、シンポジストら関係者と本学の教員が今後の連携推進に向けて情報交換を行い、交流を深めました。

学内トピックス

話題の広場から

第10回 弘前大学総合文化祭「テーマ『彩』」を開催

第１０回弘前大学総合文化祭が１０月２２日（金）から２４日（日）の３日間にわたり、本学文京町キャンパスで開催されました。

今年のテーマ『彩』は、地域の方々、弘大生、教職員、留学生等、様々な方の手によって、総合文化祭が彩られ、華やかな盛り上がりを見せて欲しいという想いから掲げられました。

オープニングフェスティバルでは、集まった大勢の観客を前に総合文化祭推進委員会委員長の遠藤学長が声高らかに開祭宣言し華々しくスタートしました。

期間中は、学生主体の模擬店でキャンパスは賑わい、学生の日頃の研究成果をもとにした実習や実験を直接体験できる「サイエンスの招待」をはじめとし、様々な研究発表がありました。さらに、本年度は第１０回弘前大学総合文化祭特別企画として、「どきどきキャンプお笑いライブ」が開催され、会場は大きな拍手と笑いに包まれました。また、教職員の芸術作品を展示した「職員芸術・造形作品展」や県内各地から計８チームが集合し、華麗な演舞を披露した「よさこい弘大」、文京町キャンパスを舞台に熱戦が繰り広げられた「駅伝大会」といったイベントの他に、一般来場者が参加できる「Let's enjojoy BINGO!」や「アームレスリング大会」、「○×クイズ」など多彩な催しも行われました。

昨年同様、包括協定を締結している弘前市により行われた「地元産農産物販売、りんごジュース無料試飲会」や、青森で採れた海と山の幸の紹介及び販売を行った「鰺ヶ沢物産展フェア」にも多くの来場者が訪れていました。

本学後援会からの助成によるキャンパス内外を彩る幟、提灯も掲げられ、お祭りムードを盛り上げていました。

学生、教職員、地域住民が一体となり本学の更なる飛躍が感じられる３日間となりました。

遠藤学長の開祭宣言

Opening Festival

弘前大学YOSAKOI サークル「焔舞陣」による華麗な演舞

看板娘コンテスト

腕相撲大会in 弘大

駅伝大会

来場者で賑わうキャンパス

学長主役イベント

Final Festival

【全学イベント】

- ■Opening Festival
- ■職員芸術・造形作品展
- ■よさこい弘大
- ■駅伝大会
- ■Final Festival
- ■学長主役イベント
- ■花火
- ■てがたDEアート～みんなでつくろう彩りの空～

【弘大祭　オフィシャルイベント】

- ■看板男子コンテスト ～貴方の心、彩ります～
- ■Let's enjoy BINGO!
- ■イントロ♪ステーション～名曲ドレミファソラシどん～
- ■パフォーマンスLIVE☆
- ■看板娘コンテスト ～君が彩る虹色ステージ～
- ■腕相撲大会in弘大
- ■第10回弘前大学総合文化祭特別企画どきどきキャンプお笑いライブ
- ■DANCE SHOW TIME!
- ■学部長VS弘大生～学部長とガチンコバトル～
- ■目指せ弘大カラオケキング
- ■○×クイズ
- ■弘大祭グルメバトル!～心も体も満腹に♪～
- ■強運王は誰だ!?
- ■大抽選会
- ■弘前大学ソフトボール大会2010
- ■スタンプラリー2010
- ■着ぐるみで癒されよう!

「学生アンバサダー」報告会を開催

本学では、１０月２１日（木）、「学生アンバサダー」報告会を開催しました。

「学生アンバサダー」制度とは、本学の学生を『学生大使』として出身高等学校へ派遣し、後輩である高校生に本学の魅力や学生生活等について説明するもので、本学に対する理解増進を目的に一昨年度から実施しています。派遣先の高等学校から好評であったことから、今年度も継続され、３回目の実施となりました。

報告会には派遣者１３名のうち９人が出席し、大学の魅力、学生生活をプロジェクターを使用し、高校生に説明したことなどが報告されました。

今回の報告会を通じて、「受験勉強」に関することを含めた高校生に身近な視点から大学を理解してもらい、学生の目線で意見交換を行うことの重要性が再認識させられるとともに、派遣先の高等学校からは、「進路選択の励みになる」、「先輩から刺激をもらったことでやる気を起こし始めた生徒が出てきた」といった感想がありました。

「学生アンバサダー」報告会の様子

平成22年度「被ばく医療プロフェッショナル育成計画」開講式を挙行

１０月２５日（月）、平成２２年度文部科学省科学技術振興調整費「地域再生人材創出拠点の形成」プログラムに採択された「被ばく医療プロフェッショナル育成計画」の開講式を弘前大学創立５０周年記念会館で挙行しました。

本事業は、原子力関連施設が数多く存在する地域の背景をもとにした青森県の地域再生計画に基づき、本学と青森県及び原子力事業者が連携し、被ばく医療の基礎から救命救急医療にも及ぶ幅広い専門領域の諸問題を理解できる能力を習得させる専門性の高い教育研究カリキュラムを構築し、被ばく医療のプロフェッショナルを育成することを目的としており、育成期間は３年間。第一期生として、科学コース３名（大学教員１名、診療放射線技師１名、行政担当者１名）、医科学コース６名（救急救命士２名、行政担当者１名、看護師３名）、計９名の受講者が決定しています。

開講式では、遠藤学長、三村青森県知事（石岡青森県健康福祉部次長代読）の式辞に続き、来賓として、鈴木文部科学副大臣、嶋（財）環境科学技術研究所理事長、山下（独）科学技術振興機構科学技術振興調整費プログラム主管から祝辞が述べられました。最後に、受講生を代表し、弘前消防署勤務　渡邊健一郎さんから、「青森県における緊急被ばく医療の中心的役割を担うと共に、県民が安心して安全に暮らせる社会実現の一翼となることを約束します」との決意が述べられました。

開講式に引き続き、記念講演会が開催され、明石（独）放射線医学総合研究所緊急被ばく医療研究センター長が、「緊急被ばく医療から学ぶもの」と題して講演し、参加した約１５０名が熱心に聞き入りました。また、記念講演会終了後、受講生・講師・関係者を交えた意見交換会が開催され、活発な意見・情報交換が行われました。

式辞を述べる遠藤学長

祝辞を述べる鈴木文部科学副大臣

鈴木文部科学副大臣が弘前大学を視察

鈴木文部科学副大臣が、１０月２５日（月）、「被ばく医療プロフェッショナル育成計画」平成２２年度開講式に出席するため本学を来訪し、開講式終了後、医学部附属病院を視察しました。

本年７月に本格稼働した高度救命救急センターの視察では、浅利センター長から重症全身熱傷を治療するＢＣＵ（無菌室）、緊急被ばく医療に対応した特殊処置室などの設備、同センターが地域の緊急医療に果たす役割の大きさなどについて説明が行われ、鈴木副大臣は熱心に聞き入っていました。

同センターの視察に引き続き、附属病院長室において遠藤学長、花田附属病院長、佐藤医学研究科長、對馬保健学研究科長らと懇談が行われ、冒頭に遠藤学長から同大の概要及び主要な取り組み等について説明があった後、医学部及び附属病院の現状、今後の大学運営などについて活発な意見交換が行われました。

なお、視察には平野秘書官が随行したほか、附属病院長室での懇談には小西（独）科学技術振興機構副調整役が同席しました。

説明を受ける鈴木文部科学副大臣（左から2番目）

学内トピックス

話題の広場から

弘前大学「医用システム開発マイスター」養成塾 平成22年度基礎コース修了式及びアドバンストコース開講式を挙行

関係者による記念撮影

本学では、10月29日(金)「医用システム開発マイスター」養成塾の第2期受講生の基礎コース修了式及びアドバンストコース開講式を、大学教職員、自治体・青森県関係者、地域企業関係者など約80名の出席を得て挙行し、併せて、医用工学に関する記念講演会を開催しました。

「医用システム開発マイスター」養成塾は、平成20年度文部科学省科学技術振興調整費・地域再生人材創出拠点の形成プログラムに採択されたものであり、青森県内企業技術者を対象に、医療機器・検査装置などの医用システムの開発を先導できる中堅技術者を育成することを目標としています。受講生は、基礎コース半年、アドバンストコース1年半の研修を受けて、「医用システム開発マイスター」を目指します。

式では、遠藤学長が、「皆さんの手により、この津軽の地に、他にはない新しい産業が興ることを期待している」と式辞を述べ、受講生に基礎コース修了証を手渡しました。櫻庭青森県商工労働部長の挨拶(永井青森県商工労働部次長代読)、アドバンストコースへの進級者7名の紹介に続いて、第1期受講生のアドバンストコース研修において、「企業間インターンシップ」を受入れた弘前航空電子株式会社に対して、遠藤学長から感謝状が贈呈されました。

弘前大学附属図書館第6回学生『言語力』大賞コンテストを実施

受賞者と関係者による記念撮影

本学附属図書館では、平成17年7月29日に「文字・活字文化振興法」が公布・施行され、10月27日(水)が「文字・活字文化の日」として制定されたことを記念し、学部学生を対象とした学生『言語力』大賞コンテストを実施しています。

コンテストは、学生が、コンテストをとおして問題解決にあたって、十分な調査能力、明快な論理能力、説得力をもつ表現能力を養うことを目的として、文学作品と評論の2部門を設け、約4千字の作品を募集しています。

第6回目となる今年度は、両部門合わせて21編の応募があり、学内外の有識者を審査員に厳正な審査が行われ、人文学部2年の山内　梢さんの「光の汀」が、文学作品部門の大賞に輝きました。また、優秀賞2作品、佳作3作品が選ばれ、11月5日(金)に同附属図書館において表彰式が行われました。

受賞者には、長谷川成一附属図書館長から賞状と副賞の図書カードが贈られました。

大賞となった「光の汀」は、恐山と下北の自然をモチーフに主人公の女性と旅の男性との会話が幻想的で完成度の高い作品と審査員から高く評価されました。受賞した山内さんは、「幼い頃から自然豊かな青森県のいろいろな場所へ父に連れていってもらった。自分の作品にはそうした思い出がこもっている。父に感謝したい」と喜びを語りました。

受賞作品は、同附属図書館ホームページで公開されています。

若者の『言語力』不足がマスコミ等で論じられる中、本学が先駆的に取り組んできたユニークな事業として他大学からも注目されています。

「ふじのふるさと記念広場」開園記念式典を挙行

記念碑を囲んでの関係者による記念撮影
(遠藤学長(左から3人目)、渡辺財務・施設担当理事(左端)ら)

本学では新たに整備された「ふじのふるさと記念広場」の開園記念式典を11月13日(土)に挙行し、大学関係者のほか来賓等関係者約80名と共に開園を祝いました。

同広場は、同大農学生命科学部附属生物共生教育研究センター藤崎農場にあった旧農林省園芸試験場東北支場の研究施設として唯一現存する歴史的建物「ガラス温室」の修復をはじめ、リンゴ品種「ふじ」の生誕70周年を記念した記念碑の建立、地元藤崎町から譲り受けた「ふじ」の原木株分け樹の移植等を行い周辺を整備したもので、藤崎町と共にリンゴ「ふじ」のPRを行う起点となります。

記念式典では、遠藤学長が「りんごの歴史を語り継ぐよすがとすると共に、広場が藤崎町を中心とした地域の憩いの場、研究者にとっての励みの場であり、また将来の観光のポイントになるよう願う。」と開園に当たっての式辞を述べた後、来賓の三村青森県知事、小田桐藤崎町長、長谷川農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所長の祝辞に続き、同広場を管理する石川農学生命科学部附属生物共生教育研究センター長から同広場の成り立ちや概要等の説明と共に今後の活動への抱負が語られました。

国立大学法人弘前大学主催音楽会 弘前大学フィルハーモニー管弦楽団演奏会～青森公演～を開催

会場の青森市民ホールで演奏する弘前大学フィルハーモニー管弦楽団

本学フィルハーモニー管弦楽団による演奏会が、去る11月23日(火・祝)青森市民ホールにおいて開催されました。

平成15年度から始まった本学主催のこの演奏会は、昨年度は八戸市で行いましたが、今年度は青森市での開催となりました。

当日は、青森市民を中心におよそ370名の来場者があり、安達本学名誉教授の指揮で、P.I.チャイコフスキーの交響曲第5番他、計3曲が演奏され、来場者は迫力ある演奏に耳を傾けていました。

演奏会終了後、来場者からは「素晴らしい演奏に感動しました」「また青森で開催してほしい」などの感想が寄せられました。

平成22年度弘前大学「公開授業」を開催

公開授業の様子

本学では、11月8日(月)から11月22日(月)まで「弘前大学教育・学生委員会」と組織的なFD活動を推進するために編成された「弘前大学FDネットワーク」が共催し、「公開授業」を実施しました。

これは、授業改善のための教員による相互研鑽のための取組であり、授業設計者である教員が自らの授業を振り返り、授業方法の改善・充実に繋げるのみならず、授業参観者が良い点を見出し、自らの授業方法の改善・充実に活用することを目的としています。

また、今年度より公開する授業を12科目から38科目に増やし、その他にも高大連携の充実に資するため、試行的な取組として高等学校教員へも授業を公開したところ、本学教員約100名及び高等学校教員4名が各々の授業を参観しました。

なお、本学では、別事業の弘前大学ドリーム講座(出張・出前講義)として出向いた高等学校で、本学教員が高校生に授業を行う前に、高等学校教員の授業を参観し、本学教員と高等学校教員との間で相互授業参観が実施されました。

参観者からのアンケートでは、「授業公開者がノートを見ずに、自らの言葉で講義していた点が素晴らしい」や、「教科書に掲載されていない例をいくつも示し、頻繁に学生に質問しながら話し続けて行う授業方法を、自身の授業方法に是非取り入れてみたい」などの感想が寄せられました。

平成22年度文部科学省大学生の就業力育成支援事業 弘前大学フォーラム「地域とともに育む大学生の就業力」を開催

今年度の取組の概要と成果を発表する学生

本学では、平成22年度文部科学省大学生の就業力育成支援事業の採択を受け、第1回目となる弘前大学フォーラム「地域とともに育む大学生の就業力」を1月26日(水)に開催しました。

今回のフォーラムでは、本学で採択された課題「地域企業との対話を通して培う企画提案力」をテーマに、2つの基調講演と学生による地域企業の抱える経営課題を素材とした課題解決型学習の成果発表を行いました。

遠藤学長、石堂人文学部長の挨拶に続き、神田文部科学省高等教育局専門教育課企画官を講師に迎え、「大学における就業力育成」と題した基調講演を行いました。神田企画官からは、大学生の社会的・職業的自立が図られるよう大学の教育改革を支援していくことや、他大学における先進的取組の紹介がありました。引き続き、坂本弘前観光コンベンション協会企画開発部長が「地域が実践する大学生教育」と題する講演を行いました。

後半は「地域との連携講義－大学生のチャレンジ2010－」と題し、本学人文学部3年生21人が4チームに分かれ、今年度の取組の概要と成果を発表しました。学生たちは、それぞれの取組による課題点・改善点を発見し、コミュニケーション能力やマナーの向上等につなげていきたいなど、今後の抱負を語りました。

当日は、学生や企業関係者ら約150名の参加があり、学生たちの多彩なアイディアに興味深く耳を傾けていました。

[男女共同参画推進室]

さまざまな立場の人が、学びやすく働きやすい弘前大学になるための第一歩

平成21年10月1日、弘前大学に男女共同参画推進室が発足しました。性別や出自、立場の違いにかかわりなく、個人がその個性や能力を充分に発揮できる社会を目指し、さまざまな取り組みを進めています。また、平成22年からは、「つがルネッサンス！地域でつなぐ女性人才」事業も始まりました。その趣旨と今後の取り組みについて男女共同参画推進室の杉山祐子室長にうかがいました。

情報を収集し一本化することで制度を活用しやすい環境を作りたい

質問　男女共同参画推進室を発足するに至った経緯について教えて下さい。

遠藤学長や、藁科総務担当理事から男女共同参画推進室のお話をいただいたのは、平成20年のことです。弘前大学では、育児休業や介護休暇制度、学内保育園の設置などの取り組みがあるものの、情報が集約されていないことから、それらの制度が使いにくい状況にありました。また、制度があることを知っていても、周囲への遠慮や環境の不自由さから、実際にはあまり利用されていないのが実状でした。そこで、情報を収集して一本化し、必要とする情報にアクセスしやすいしくみを作ること、また、制度について相談しやすい環境を作ることを目指し、男女共同参画推進室を発足することとなりました。

男女共同参画推進室 室長
杉山 祐子（すぎやま ゆうこ）
人文学部教授

筑波大学大学院歴史・人類学研究科単位取得退学。京都大学博士（地域研究）。筑波大学助手などを経て現在、人文学部教授。アフリカの農耕社会と在来知、近代化やジェンダーについて研究。

質問　弘前大学の男女比率には特徴がありますか。

平成22年の教職員の男女比率をみると、総数は1,844名のうち女性が837名（45.4%）と大幅な開きはないのですが、教員だけについてみると平均13.9%と大きな差があります。学部専任担当別の女性教員数では、理工学研究科が3名（3.4%）、農学生命科学部が3名（4.5%）、医学研究科が10名（6.1%）と、全国平均をさらに下回る状況でした。このことは、特に女子学生への今後の教育や将来に向けての職業選択に少なからず影響を与えると推測されます。女性教員比率の向上を達成することは、男女共同参画推進室が取り組んでいかなければならない重要な課題です。

質問　推進室は、気軽に入りやすい雰囲気ですね。

明るい色のテーブルやイスを設置することで、入りやすい空間を心がけました。室内にはキッズコーナーもあり、お子さんを一時的に遊ばせることもできます。

総合教育棟の入り口を入ってすぐ、学生ホールの向かいにありますので、気軽に活用していただきたいですね。

より多くの方々に知っていただくためにポスター・ロゴマークを募集

質問　発足後は、どのような活動を行いましたか。

まずは、推進室の取り組みがひと目でわかるように、ニューズレター「さんかくつうしん」を発行しました。誌面には、弘前大学の男女比率の現状や、もっと知ってほしい制度の紹介、学生のためのハラスメント相談Q&Aなども載っています。

また、「弘前大学に学び働くすべての人々が立場や属性の違いにかかわらず、その能力を最大限発揮できるような環境づくりに取り組む」という男女共同参画の理念を広く知っていただき、多くの方々に利用していただくために、広報用のポスターとロゴマークのデザインを募集しました。

その結果、男子学生を含め全学部の多くの学生から応募をいただき、予想以上の反響がありました。

採用されたポスターと、ニューズレター「さんかくつうしん」

男女共同参画推進室内にあるキッズコーナー

ニューズレター「さんかくつうしん」の編集を担当している、人文学部教授の山田嚴子さん

男女共同参画推進室のHPもあり。
アドレスは、http://www.equ.hirosaki-u.ac.jp/equality/

質問　講演会も開催されましたね。

平成22年度に開催した第1回の講演会は、昭和大学の須長先生に「男性から見た男女共同参画社会とは」というお話をお願いしました。今年度は第2回として、京都大学の稲葉先生に「京都大学の挑戦」と題してご講演いただきました。男性教職員や学生も多く参加し、男女共同参画への興味を深めたという声が寄せられています。

「つがルネッサンス!」が地域の女性人才をつなぐ

質問　平成22年から始まった事業「つがルネッサンス!」で、弘前大学はどのように変化していきますか。

「つがルネッサンス!」は、文部科学省科学技術振興調整費の「女性研究者支援モデル育成」に採択された弘前大学の提案課題です。現在、私たちが持っているものを芯にして、人才（才知ある人々）を育てる持続可能なしくみを作ろうという考え方が、この提案の元になっています。

目指すのは、地方都市の条件をいかしたワークライフバランス（仕事と家庭・地域生活の両立）です。弘前は大都市圏から遠く、交通の便も良いとはいえません。研究を続けたくても、その機会が見つからないこともあります。その一方で、職住接近のコンパクトな都市構造や、子育て・介護についての公的支援の選択肢、学内での様々な取り組みなどは、大都市圏にはない利点です。弘前がもつ利点をいかしながら、女性研究者の研究継続を支援するモデルを構築していきたいと考えています。

また、この提案では、女性研究者が家族と一緒に赴任できる制度や、子連れで学会などに参加するための支援、部局や世代を超えた気軽な相談・情報交換ができるネットワークづくりなどを計画しました。それらの計画によって、女性研究者の研究力を強め、研究者の裾野が広がっていくことを期待しています。

現在、弘前大学創立60周年記念会館コラボ弘大内に「つがルネッサンス!」用の部屋を設けています。考えるだけではなく、出来るところから、変えられるところから行動に移し、大きな効果へとつなげていきたいと思います。

「つがルネッサンス!」のメンバー

女性研究者をつなぐネットワークをつくりたい

男女共同参画推進室
鶴井 香織（つるい かおり）
特任助教 博士（農学）

昨年「つがルネッサンス!」のお話をいただき、現在プロジェクトに参加しております。

これまで京都大学でバッタの研究をしていたのですが、理科系の女性研究者は少なく、20人以上いる研究室のメンバーのうち女性は2人という状況でした。そこにはやはり、マイノリティーゆえの不便さがありました。

現在は、同じように男性の中で奮闘する女性研究者をつなぐネットワークをつくり、お茶会などを開いています。そこでは、研究者を目指す女子学生へのキャリアモデルの提示もすすめています。

今後は弘前大学出版会と連携し、女性研究者の研究成果発表プロジェクトを考えています。また、自分の研究分野をいかして津軽で自然観察会を開き、理科好きの子どもを増やしてていけたらと思っています。

理科系の裾野を拡げたい

男女共同参画推進室
赤嶺 真由美（あかみね まゆみ）
特任助手 博士（環境科学）

私はこれまで主にコガネムシの色彩変異についての研究に取り組んできました。

昨年男女共同参画推進室の特任教員の公募を見かけ、一女性研究者として何かお手伝いができたらと思い応募しました。

私の主な仕事は、次世代の理系研究者を増やすため、理科離れ対策をおこなうことです。私は修士課程まで女子大にいたので女性研究者としてのマイノリティをあまり感じてきませんでしたが、「女性なのに虫が好きなんて」と珍しがられたりすることはよくありました。それについて深刻に受け止めてきませんでしたが、この仕事に就いてそういう女性だからという感覚が女子の理系進学率の低さの原因のひとつであることを知りました。

現在は、学内のイベント情報がよくわかるようにイベントカレンダーを作成したり、自然観察会の準備をしています。性別に関わりなく、科学を楽しむ心を持った、新しい世代が育ってほしいです。

企業と学生が連携し、新商品や新プランを誕生させることで就業力を高めると共に、街を元気にしていきたい

森・高島ゼミナールでは、昨年度から地域企業との対話を通して、企画提案を行う「地域連携授業」に取り組んでいます。学生が、企業と一緒になりプロジェクトを進めることで、地域企業に対する関心や就業力を高めることにつながっています。取り組み内容と、連携することで生まれた成果についてご紹介します。

「弘前路地裏探偵団」の街歩きの様子

森　樹男（もり たつお）

人文学部教授・経営学博士
大学院地域社会研究科兼任教員
地域共同研究センター兼任教員

1966年生まれ。1993年3月、神戸商科大学大学院経営学研究科博士後期課程を退学。1993年4月、弘前大学人文学部着任。日系多国籍企業における地域統括本社制、特に欧州地域統括本社について研究。その他、北欧における産学官連携と地域活性化や、漫画同人誌の電子書籍化と海外展開について研究。

弘大生の就業力を育成することが地域企業に活力を与える

弘前大学人文学部では、平成17年度に「弘前大学人文学部附属雇用政策研究センター」を設立し、青森県の課題である雇用問題に関して、地域雇用の実態を調査、分析すると共に、地域に有効な知見や対策を提案してきました。

また、弘前大学学生就職支援センターが、企業に対して実施したアンケート調査の結果を見ると、弘前大学卒業生は、仕事に対する理解・判断力、職務遂行能力に優れているものの、「対人関係・仕事の協調性」、「コミュニケーション能力」がやや弱いということが示されました。

一方、アンケートに答えていただいた青森県の企業側は、雇用環境が大変厳しく、地域独自の活性化を行うことで雇用機会を拡大することが、課題とされていました。

そこで、昨年から弘前大学人文学部では、地域企業の抱える経営課題を素材に課題解決型学習を実施。学生の企画提案力を育成すると共に、地域における雇用機会の拡大を図るために「地域連携授業」に取り組んでいます。

ヨーロッパの地方都市で起きた成功は青森でもきっと起こせる

現在、このプロジェクトに参加し、地域企業との共同開発や、プレゼンテーションを行っているのが、経営学コースの森・高島ゼミナールです。

森教授は、ヨーロッパで産学官連携について研究していた時、とある地域経済の停滞した地方都市が、企業と大学、行政が互いに手をとり、知識や技術を出し合うことで、イノベーションに成功し、企業や街が息を吹き返したという事例を知りました。

その時、「地域企業に元気がなく、活気を失いつつある青森でも同じように成功させることができるはず」と確信を持ったのだそうです。

文部科学省支援事業が大きなバックアップに

1年目は、学生たちが企業を訪問し、抱えている問題点や課題の相談を受けて、それに対する解決案を提言するという流れでした。できるならば、単に発表するだけではなく、解決案を実践してみたり、試作品を作ってみたりと、「PDCAサイクル」の「D（Do）C（Check）A（Action）」の部分まで進められることが理想でしたが、それはかないませんでした。

しかし2年目には、文部科学省による「大学生の就業力育成支援事業」に弘前大学が採択され、活動に弾みがつきました。この支援事業は、大学と産業界等との連携による実践的な教育を含む、学生の卒業後の社会的・職業的自立に向けた新たな取り組みを国として支援することを目的としています。採択されたことで、学生たちは自分たちのアイデアを提案から実践まで行うことが可能になりました。

五所川原市にあるコミュニティカフェ「でる・そーれ」との連携では、商品の販売戦略を提案。りんごのセットをより魅力的にみせるために、店舗スタッフや生産者と対話を重ね、知恵を絞り、その結果「奥津軽からおすそわけ」という名の、木箱に入った5個詰めのセットが完成。当初、りんごの種類は「ふじ」のみだった箱の中身を、「5個とも別の種類が入っていたほうが、バラエティ豊かで購買意欲をくすぐるのでは」と、昔ながらの品種「印度」や「ジョナゴールド」、「王林」などの入ったセットを販売しました。紙袋やチラシも制作して学生自ら宣伝したところ、あっという間に完売しました。

また、「ベストウエスタンホテルニューシティ弘前」との連携では、学生ならではの宿泊プランを考案して、ウェブ上で実際に販売しました。「観光の閑散期（9月～12月中旬）において如何にして宿泊プランを販売するか」、「弘前市の観光資源を使い、どのようにして顧客を呼び込むか」という視点から、学生たちはユニークなプランを提案。りんご公園巡り、りんご狩り、りんごの能力検定試験を通して弘前りんごに関心を深めてもらうプランや、学生がツアー客と一緒に街を歩き弘前の隠れた魅力を案内するプランなどが出されました。学生と一緒に街歩きをするプランには、最終的にキャンセルとなったものの、1組の予約が入りました。

地域企業と共同開発した商品について、プロジェクターを使って発表

「地域企業と対話できるし、プレゼン能力も身に付くのでためになる」とゼミ生たち

特任准教授の大浦雅勝氏が、発表をチェックしアドバイス

就業力に欠かせないプレゼンテーション能力

学生たちに地域連携授業の感想を聞いてみると、「企業の方々と直に話すことができて勉強になった」、「グループでひとつのことをやり遂げられたことが、良い経験になった」という声だけではなく、「プレゼンテーションのやり方がわかって良かった」との声も多く聞かれました。

新商品やプランを考案後、それを提案するプレゼンテーションは、就業力には欠かせない能力です。今回の授業では、プレゼン経験の豊富な民間人を採用。ウェブコンサルティング会社の大浦雅勝氏を特任准教授として招き、指導を仰ぎました。学生たちは、発表時の声の大きさや間の取り方から、プロジェクターで映し出された文章の配置や写真の画質までチェックを受け、スキルを磨きました。

学生たちを成長させる地域との交流

地域連携授業以外にも、学生たちは地元団体の取り組みに積極的に参加しました。そのひとつが「弘前路地裏探偵団」です。この団体は、「地元の人たちがもっと地元のことを知る」ことをコンセプトに、弘前ならではの生活文化やそのルーツを調査し、そこで得た知識や情報を楽しみながらガイドとして伝える活動をしています。メンバーには公務員や市内のホテルの支配人、OL、主婦など幅広い職種・世代の人たちが揃います。学生たちは活動に参加することで、観光客の視点から地域を見つめ直す経験と共に、様々な職種の人たちとの交流を通して大きく成長できたと思います。

さらに広がっていく地域連携授業の可能性

現在、地域連携授業には、木村食品工業やベストウエスタンホテルの他、弘前市観光コンベンション協会やブナコ漆器製造など8つの企業が参加しています。来年度には参加企業が増える予定もあり、新たな商品やイベントなども誕生するかもしれません。

また、より多くの企業に触れることで、対話や企画提案などの就業力がさらに養われると共に、地域企業に就職する良いきっかけになることも期待できそうです。

弘前大学出版会からのご案内

ルート君と数楽散歩

本瀬　香　著

A5判・136頁
定価　1,680円
（本体1,600円）

ISBN　978-4-902774-62-7　発行　2010年6月9日

本書は、ルートをテーマとした3つの話題、「作図」、「算術幾何平均」、「平方剰余」について解説された数学の専門書である。いずれも若き日のガウスの偉業を現代の数学的な立場から解説している。これらは後に3本の大木に成長することになる。第1章「作図」では、18歳のガウスの発見「定規とコンパスのみによる正17角形の作図」について紹介されている。この発見は、若きガウスをして数学者になることを決意させ、碩学ガウスにみずからの墓標へ正17角形の刻印を切望させるに至った。ガウスにとっていかに鮮烈な発見であったかがうかがえる。上記の3話題は、独立に読むことも可能である。これらの発見のルーツ（roots）はルート（root）であることを読者は本書を読み進むうちに知ることになるだろう。学部のセミナーや特論に推薦したい著書である。

成田彦栄氏考古・アイヌ民族資料図録

弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター編

A4判・150頁
定価　2,940円
（本体2,800円）

ISBN　978-4-902774-64-1　発行　2010年9月30日

本図録には、青森市の医師成田彦栄氏の収集品のなかから、考古資料275点、アイヌ民族資料33点と、蓑虫山人筆「陸奥全国神代石古陶之図」を掲載した。考古資料は、縄文時代晩期に東北地方で華開いた亀ヶ岡文化の遺物が中心であり、八戸市是川遺跡出土品や県立郷土館が所蔵する風韻堂コレクションとともに貴重な資料といえる。成田彦栄氏の収集品は、これまで数点の著名な遺物が展示会や図録などで紹介されただけで、自宅の蔵の中に大切に保管され、ごく一部の関係者しか目にする機会がなかったため、長い間「幻のコレクション」であった。本図録には実測図や拓本、展開写真が豊富に掲載されており、普段ガラスケース越しには知ることのできない土器や土偶の作り方や細部の特徴が手に取るように分かる内容となっている。縄文文化の高度な工芸技術を物語る遺物を多数掲載しており、考古学に興味のある方は勿論、原始美術や工芸に関心のある方にも薦めたい。

地方公企業の経営改革 ―自己経営評価と経営分析をとおして―

藤田正一　著

A5判・235頁
定価　4,515円
（本体4,300円）

ISBN　978-4-902774-61-0　発行　2010年6月30日

本書は、地方公企業の経営活動が地方公共団体の財政に過大な負担を招くことなく、かつ、自らの経営目的としての公益性を効率的、効果的に達成するための経営改革について究明することを目的としている。本書での地方公企業の経営改革は、各地方公企業（公社等法人）が自らの経営状況について経営評価シートを駆使して自己経営評価した結果と、被所管の地方公企業の経営状況について所管課が経営評価した結果と、その各地方公企業の自己経営評価の結果及び所管課の経営評価の結果について調査・検討をした上で各地方公企業に対して経営改革の方向性を示した第三者経営評価機関の提言内容と、各地方公企業の決算書という4種類の経営資料を基に、マネジメントの面と財務の面からの経営分析をとおして、地方公企業（公社等法人）が取り組むべき共通的経営改革について考察したものである。

白神研究　第7号

弘前大学白神研究会編

A4判・55頁
定価　980円
（本体933円）

ISBN　1349-7480　発行　2010年11月19日

本号の特集ではオープンして間もない弘前大学白神自然環境研究所及び白神自然観察園の概要や活動状況を紹介しており、白神山地の研究拠点のみならず、自然観察の場としても白神自然観察園をご利用・ご活用頂きたい。連載「白神研究会の観察会ルート」は大川のナベクラ沢の尾根コース「ナベクラのカミナガレ」である。ここは巨木が多く、いかにも白神山地らしいコースであり、コースの状況や巨木などについて解説している。研究報告は、植物、気象観測、土壌などの研究で4編を掲載し、自然科学の幅広い分野にまたがっている。従来からの研究に加えて、新たにノハナショウブに関する研究報告は門外漢でも分かりやすく、カラフルな写真だけでも充分に楽しめ、白神山地の理解を深め自然に親しむための一助となるものと思われる。

東北発！地域に根ざした技術・家庭科の授業

大谷良光・日景弥生・長瀬清　編著

B5判・311頁
定価　1,995円
（本体1,900円）

ISBN　978-4-902774-63-4　発行　2010年9月28日

本書は、東北6県の中学校技術・家庭科研究会の教員と6教員養成大学・学部の技術科、家庭科の教員が協働し編著した大著である。技術・家庭科教育の国際的動向と社会の変化を反映した2008年版中学校学習指導要領の改訂を踏まえ、特に「地域」という視点で授業を編成した授業論と実践報告の先駆的な著である。日本の教育史において東北地方は生活に根ざした教育を財産としてもっており、技術・家庭科にもその財産は蓄積されている。本書はその財産を東北地区『技・家研』大会50周年を記念して全国に発信した。また、本書は1教科の書にとどまるものではない。「未来型学力とは」「活用力を高める授業の方法」等、現代の学力論を視野に、知識・テスト重視の学校カリキュラムのあり方に一石を投じた。多くの教師、研究者、教師をめざす学生に読んでもらいたい。

EU統合の流れの中で東欧はどう変わったか 政治と経済のミクロ分析

髙橋和・秋葉まり子　著

A5判・192頁
定価　2,205円
（本体2,100円）

ISBN　978-4-902774-65-8　発行　2010年12月20日

本書の目的は、1989年の体制転換以降東欧諸国が、自らの歴史的過去を背負いながら急速に進むEU統合の流れの中で、その政治的、経済的システムをどのように形成、変化させてきたのか、それはそれぞれの国の社会や仕組みに適合的なものとなり得ているかどうかを捉えようとするものである。これを、第1部「ユーロリージョンの拡大と制度化の陥穽」と第2部「ポーランドの金融部門のシステム分析」に分けて、政治と経済、それぞれミクロの視点で明らかにしようとした。今日の急速なグローバル化やヨーロッパにおける地域統合の流れは、それに巻き込まれようとしている国々に、立ち止まってその是非を問う余裕すら与えない。こうした状況は多かれ少なかれ世界の各地で見られる現象であるが、そこで私たちはどのようにして自国に独自のシステムやアイデンティティを保っていけるのか、東欧の事例を通して考えていただきたいと思っている。

弘前大学メールマガジン「ひろだいメルマガ」会員募集のお知らせ

弘前大学メールマガジン「ひろだいメルマガ」では、弘前大学への理解を深めてもらうことを目的として、最新の情報をメールで配信しています。

登録は簡単に出来ますので、配信を希望される方は、下記ＵＲＬより是非ご登録ください。購読は無料です。（登録はパソコンのアドレスでお願いします。）

「弘前大学教員紹介シリーズ」

弘前大学に在籍する先生の、研究内容はもちろん、趣味など、普段の授業では聞く事が出来ない情報も紹介します。

「今、この部活動・サークルがおもしろい」

学生記者がイチオシの部活動やサークルの活動内容などを詳しく紹介します。まだ、どの部活、サークルにも入っていないけれど何か始めたい、そんな人は、このコーナーでその「何か」を見つけられるかもしれません。

講演会・セミナー等のお知らせ

予定されている講演会やセミナー等のスケジュールを紹介します。

詳細は、下記ＵＲＬをご確認ください。

ひろだいメルマガ　http://db.jm.hirosaki-u.ac.jp/magazine/

ひろだい vol.16
2011年３月発行
弘前大学総務部総務課
表紙：腕を組む土偶（人文学部 附属亀ヶ岡文化研究センター蔵）

「ひろだい」に関するご意見・ご感想をお聞かせください。
「ひろだい」はWebでもご覧いただけます。
下記URLからお進み下さい。

弘前大学
〒036-8560　青森県弘前市文京町1番地
Tel.0172-39-3012　Fax.0172-37-6594
E-mail：jm3012@cc.hirosaki-u.ac.jp
http://www.hirosaki-u.ac.jp

FSC www.fsc.org ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC™ C023138
PRINTED WITH SOY INK Trademark of American Soybean Association
環境保全のため、大豆油インキを使用しています。